



Vision

「科学するところ」

熊本保健科学大学 衛生技術学科 教授

赤池紀生

新発見や新技術の開発・発明は人類にとり未知の分野を開拓し、大なり小なり社会に還元され人類の存在とその福祉に貢献する。科学者は自分の夢を実現しようと日々努力するが、どちらかといえば研究が思い通りにいかない場合が多い。しかしその都度悩んだり諦めたりしていたら進展は望めない。元々好きでやる研究だから、失敗するたびに反省、再考してチャレンジする。

ノーベル賞受賞者小柴、江崎、野依三氏の平成15年度正月対談でも、受賞の原動力になったのは彼等が子供時代に自然科学に対して持った興味であり、その時の夢を大人になって大切に育て上げた結果とのことであった。さてこのように初めに抱いた興味を維持し、発展させて大成させる基盤をつかむために必要なものは何であろうか。‘遊び’とそれを介して培われ芽生え育ってくる‘遊びごころ’が科学も含めて人生のチャレンジに重要と思われる。そして‘遊び’とはおもしろくてやることであるから、飽きることもなく倦むこともなく、没頭できるものである。一般に‘遊び’と‘科学’とは全く異なるもの、或いは両極にあるものと考えられている。しかし、実はこの二つは非常に緊密な関係にある。かくいう私もこれまでマイクロレベルで生体のしくみの研究に役立つ先端技術の開発やそれらの研究に使用する実験標本などをいろいろと工夫考案し、基礎医学研究の進展に多少とも貢献したつもりであるが、私個人の小さな経験からしても、科学に一生をかける

際には、この‘遊びごころ’すなわち自分がおもしろいと思える対象に、わくわくしながらチャレンジする‘意志’や‘動機’が目標達成の原動力になった。そしてその‘遊びごころ’とは私の場合も子供時代の‘遊び’のなかから培われた。

私は熊本県の八代の大自然、ことに万葉時代から不知火で知られる八代海からのメッセージを得て生命現象の仕組みに興味をもち、その機能解明を目的とした学徒としての道を歩んできた。しかし生命現象の仕組みの解明にはキリがなく、カマン島沖のクレフトダイビングで垣間見た深海のように底はみえない。ことに生命にかかわる研究では一つの発見が次の疑問をもたらすからだ。基礎医学での新発見が続出しているのもこのことを裏付けている。我々人間の生命についての理解は始まったばかりといっても良いだろう。生理学を志す若者が取り組むべき課題はごまんとある。もちろんこれは生命現象に限ったことではない。諸君、遊び心をもって自分の個性に適合した興味ある研究分野の発展に取り組んでみたらどうでしょうか。

この拙文を読まれた青年諸君が研究とは意外に堅苦しく構えてやるものではなく、自然体で行うものであり、誰でもその気になれば科学者になれるし、研究は楽しくやれるものだと気付いてくださればそれは小生のこの上もない喜びである。八代の海でいわば野生児のように育った私は、熊本大学薬学部で加瀬佳年教授と医学部で佐藤昌康教

授という立派な二人の先生と幸運にも巡り会うことが出来た。その後、国内外の研究所や大学で思う存分研究を行うことも出来た。その原動力は、両先生の御薫陶のおかげであり、これに加えて大自然の中での‘遊び’で培った‘遊びごころ’、

それから発した技術開発のアイデアと‘いのち’探求への肥後モッコスの熱意であったと思う。青年諸君!! ‘遊び’は‘遊びごころ’に通じ、‘遊びごころ’は科学その他一般に通じる王道です。よく遊びよく学んでください。